

「これからの衣類の 3R にどう取り組むか？」報告

京都府立大学 山川肇

消費者市民研究部会は、2010年11月4日、標記企画セッションを行った。今後の衣類の3Rについて、リユースを中心に考えたいと趣旨説明があった。企業から2名、部会から2名の報告に基づき、議論を行った。

消費者市民研究部会の岩地加世氏からは、「“衣”との付き合い方〜これでいいの？衣類のリサイクル」と題して報告があった。衣類のリユース・リサイクル割合は約2割。従来の主要なリサイクル先であるウェス、反毛とも芳しくない。リユースは輸出中心だが、国内リユースも最近伸びている。課題としては、①供給過剰・大量の死蔵衣類の問題への対処、②使い切る習慣の確立、③国内リユースのための回収ルート拡大、④リユース・リサイクルしやすい回収システム、リサイクルしやすい製品設計、⑤関係者の努力と連携など、と報告された。

泉佐野市櫛井故繊維協同組合事務局で(株)ツインテックの中西幸司氏からは、「衣類・繊維類の3R促進に向けた現場の課題―故繊維事業者からの視点―」と題して報告があった。1970年頃は資源として回っていたが、その後は故繊維需要が減少、90年代以降の淘汰の中で輸出・古着店ルートを持つ大型事業者が残った。製品の低価格化等とともに中古衣料の価値も下落、リサイクルの出口がないことが大きな問題になっている。しかし無理やり大量リサイクルすればいいわけではない。一部の生産者が回収・リサイクルを実施しているが、そういうことを拡大できるのではないかと。一方で、地域の中でのリフォームなどによる循環も考えている、と報告された。

次に(株)Don Don upの岡本昭史氏より「アパレルリサイクル市場の成長と業界初のビジネスモデル」と題して報告があった。現在、古着小売はアパレル業界8兆円の約4～5%に拡大しているといわれている。(株)Don Don upが展開する「ドンドンダウン オン ウェンズデー」は、毎週売価が下がっていく逆オークション方式と、すべての服を買い取る点に特徴があるが、それはアジア、アフリカなど海外に輸出できるから実現できている。なおTVで輸出した衣類が役立っている様子が放映されたところ、ただでも生かして欲しいという人が増えた。メディアで役に立っていることを知らせるのも、業界拡大につながるのではないかと考えている、と報告された。

最後に、NPO法人エコ・メッセの中井八千代氏より、「エコメッセ練馬活動報告 市民発電所ができるまで」と題して報告があった。この取り組みは、中古衣料販売により衣類のリユースに取り組みつつ、得られた資金をもとに太陽光発電による市民発電所を建設するというもので

ある。学校や幼稚園などに市民発電所を設置してきた経緯や関係する環境教育の取組みなどが報告された。引取は寄付だが、お店で売れるのは約1/3、残りは自立支援作業所等に委託したり、お金を出して古布業者に引き取ってもらったりしているという。またお店に衣類や雑貨があると、いろんな人が集まり、おしゃべりするようになる。それが地域の悩み事相談所にもなり、必要があれば専門機関を紹介しているということだった。

パネル・ディスカッションでは、国内リユース拡大について意見が交わされた。「故繊維事業者は自らフリマに出店するなどリユースしているが、量的には1.5%程度。故繊維業者に来る前にリユースできるものは活用されているので、故繊維業者がリユースするのは難しい」(中西氏)。「おしゃれでおもしろいことをやっていくことで共感を得ることを目指している、共感こそが大きなパワーにつながる。メディアに露出することで伝えていきたい」(岡本氏)。「大事なものは2R。今の若い人は使ったものを使うことに抵抗がないので、衣類だけでなく雑貨、子供用品などリユースショップをいろんなところに展開できるとよいのではないかと」(中井氏)。「リユースを広げるのは難しいと思っていたが希望が持てた。実際の状況をもっと発信することで、リユースが増えるのではないかと。また殺菌されていると抵抗感が和らぐのではないかと」(岩地氏)。「数年前までは故繊維くずを扱うには消毒設備が必要だったが、リユース促進のために撤廃された」(中西氏)、等の発言があった。

会場との議論では、「PTAで古着回収をした際、売れるように新しいもの持ってくるという話になった。どこかおかしいのでは」、「ドンドンダウンの値段の設定方法は?」、「マニュアルはあるがシビアではない。最終的に欲しい値段で欲しい人が買うので」、「ミッションを実現するための資金を得る活動として古着リユースがある。関心がある団体があれば、是非ご連絡を。」、「どんな時代になっても、ものを粗末にははいけません、との言葉が忘れられない。このことを忘れずに、次なる行動に移していきたい」等の質疑・コメントがあった。

最後に司会より「古着リユース拡大のためには意識の壁を乗り越えることが必要だが、そのためのヒントがあったと思う。ドンドンダウンのおしゃれで楽しい取組みへの共感、エコメッセの社会的ミッションと地域コミュニティづくりに基づく場づくり、殺菌と現場の情報発信、など。今後、本学会の中でもこの分野の研究が広がることを期待したい」とまとめがあり、企画は終了した。

参加者は約30名で、アンケートからは3つの事例とも、大変興味深く聞いていただいたと感じた。今後とも市民の目線を生かし、実践に注目した企画を目指したい。